

テーマ バックアップ拠点形成と未来都市の創生

～ 新港エリアを基軸とした石狩モデル構想 ～



つくわ まさ のり
北海道都市地域学会会長 筑和 正格

皆さん、今日はようこそおいでくださいました。お忙しい中、ありがとうございます。

今年で36回を迎える都市問題会議を、北海道市長会と北海道都市地域学会が共同で開催するにあたり、まず、入念な準備をしてくださいました石狩市や関係各位の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

私は、北海道地域学会を代表するものとしてこの場におりますが、最初にこの学会について、一言触れさせていたきたいと思います。

北海道地域学会は1963年、昭和38年に、北海道都市学会として、設立されました。

その目的は、北海道の都市研究者と、市政等の実務経験者との協力を深め、都市に関する諸科学の連携を強めることによって、都市の総合的研究の実をあげる、となっています。

この目的を果たすべく、本学会の会員は、都市に関わるさまざまな分野の研究者と、

民間や行政の実務者によって構成されています。学会活動も研究面のみならず、研究成果の具体的実現を強く意図して行われています。

そして、学会の最大の活動が、北海道市長会とともに、この都市問題会議を開催させていただくことです。

先ほどの市長のお話にもございましたように、今回のテーマは「バックアップ拠点形成と未来都市の創生～新港エリアを基軸とした石狩モデル構想～」です。

ちなみに、第1回会議のテーマは「広域行政の現状と問題 行政と住民参加」というものでした。注目を引くのは、ここで住民参加が昭和38年の段階にあります、すでにうたわれているということです。

困難な問題の解決は、行政だけが担当するのではなく、官民一体となって取り組むことが肝要であるという認識が、すでにここにあるわけです。

今回のテーマである「未来都市の創生」、ならびに「石狩モデル」がうたわれているのは、まさに、石狩市民の存在を意識するが故のことです。

石狩市の未来図を描くために、バックアップ拠点という政治的、経済的な視点が不可欠であることは、言うまでもありません。

住民への視点は、このように第1回目会議から今回の第36回会議まで不動のものであることが言えます。少なくとも私にはそう見えます。

都市問題会議のテーマは「経済」「環境」「社会」の3つを、3本柱として行ってきました。これらは活性化と、アメニティーの向上に欠かせない構成要素だからです。

しかし、昨年からの3つのテーマにさらにもう1つ、必然的に要素が付け加えられ、付加されることになりました。それは言うまでもなく、東日本大震災に鑑みた、「災害への対処」という要素です。

昨年の都市問題会議は、伊達市で開催されましたが、この開催地・伊達市では、被災者・被災地域に対する迅速な対応を行う事例を示しています。

それに引き続いて、先ほど申し上げましたように、今回のテーマにも含まれていますが、石狩市における災害への対処に直結する事例を、今回も取り上げていきます。

今回のテーマはバックアップ。北海道が昨年来「バックアップ拠点構想」を打ち出しているということに関連しています。

これは、首都圏などのさまざまな機能が集中している地域で、大災害が発生した場合、そのダメージを最小限にとどめるために、拠点を分散して、バックアップ機能を持たせようという構想です。

北海道が担う、あるいは北海道に期待されるであろう機能として、食料・水の安定供給、国内分散型の産業活動の拠点形成、さらにエネルギーの安定供給などがあげられています。

私たちは、このバックアップ構想に際して、ここ石狩市が果たしうる、あるいは担うべき重要な役割を考えたいと思います。重要な役割に注目いたします。

「バックアップ拠点形成と未来都市の創生～新港エリアを基軸とした石狩モデル構

想～」という今回のテーマは、石狩湾新港やLNGといった新エネルギーの供給能力と、石狩市が持つ潜在力に着目したところから生まれました。

札幌圏有数の産業拠点である石狩市は、有力なバックアップ拠点となりうることを、この会議の場でじっくりと検証していきたいと思えます。

第1日目の基調講演では、日本が今後どうすれば活力を回復できるのか、その中で北海道はどのような役割を果たしうるのか、北海道はこれまでのハンディキャップを逆転できるのか、などといったことについて北海道が日本の近代史の中で果たしてきた、あるいは担うことを余儀なくされた役割、それを確認しながら、大局的な視点から論じていただきます。

それに続くパネルディスカッションでは、新港エリアや新エネルギーの現状についての情報に触れながら、太平洋航路となっているところや、あるいは路線という視点も、おそらく出てくるのではないかと期待しています。そのような視点も交えて、今後の可能性を探ります。

2日目の座談会では、石狩市の市民社会。特に環境とといったものも加味しながら、目を向けていきたいと思えます。

経済面での利点を備える新港でありながら、石狩市民と

新港との関係は、極めて希薄ではないかと私には思えます。

もし、市民が新港の役割を理解し、意識の中に石狩湾新港を位置付けることができるのであれば、ひょっとしたら石狩市民は、新しいアイデンティティーを獲得できるかもしれません。

日本の全体社会に貢献しつつ、経済の活性化にもつながる取り組みが、市民の理解と承認を得て、さらに新しい市民アイデンティティーの創出へと向かっていく。果たしてそうなるのでしょうか。

この会議が、未来都市の石狩モデル、これを参加者全員で追求する機会になることを念じて、テーマ解説といたします。ありがとうございました。